



年をとると多かれ少なかれ耳の聞こえが悪くなります。聞き違えが多くなったり、話しかけた時にあいまいな表情で返事をしたり、何度も聞き返すようたり何度も

聞き返すようになると、その高齢者に難聴があるのではないかと疑うことが必要です。

高齢者の難聴には、耳垢による外耳道閉塞、慢性中耳炎や外耳道炎などの伝音難聴と、内耳や聴神経の障害による感音難聴＝老人性難聴とがあります。

感音難聴はほとんどの場合治すことができませんが、伝音難聴は治療により治すことができますから耳の聞こえが悪くなったら耳鼻科医の診療を受けることが大切です。

寝たきりや認知症高齢者の場合、耳垢が外耳道を完全に閉塞していても訴えない場合があります。急に聴力が低下したと訴えが場合、耳垢を除去するとコミュニケーションが非常に改善することもしばしばあるので、耳鼻科に受診して耳を見てもらうとよいでしょう。

老人性難聴では、加齢によって内耳（蝸牛）の機能低下が起こりさらに中枢神経の機能低下も加わって音を聞き取ることが難しくなります。特に高い音が聞き取りにくくなります。私たちはお年よりの表情をみて聞き取れているかを確認しながら、ゆっくりはっきりと話しかけなければなりません。それでも、聴力が低下してきますと、補聴器を使うことになります。

ところで、私たちの耳は周囲の雑音から必要な音のみを聞き分けるすばらしい能力を持っています。

そのため、ひどい雑音の中でも会話することができます。

しかし、補聴器は同じ割合で雑音が拡大するので、やかましさをがまんしても補聴器を使ったほうがよいと本人が思わなければ、せっかく買った補聴器を使わない高齢者も少なくありません。

理解力の低下した認知症高齢者の場合、補聴器を使わないこともしばしばあります。最近では、性能が良いものができて雑音が少なくなってきましたが、まだまだ不十分です。補聴器に慣れるまでには根気強さが必要です。

大声で話すことは介護者にとって精神的にも身体的にも消耗するものです。また、怒鳴るような調子で話しかけられると本人は相手から叱られているととらえがちです。そのような時、紙などを丸めて作ったメガホンや、自由に伸ばせる蛇腹状のもしもしホンなどを使うと穏やかに話ができ介護者のイライラが軽くなります。

補聴器をつけていても後方や斜め方向から話しかけられると聞き取りが難しいものです。相手の表情や口元をみながら言葉を理解しようとするから、向き合って話すことを心掛けましょう。

高度の難聴者には法による助成制度もあります。耳鼻科に相談するとよいでしょう。